

「長崎ぶらぶら節」と「阿蘭陀万歳」を長崎に残した 名妓凸助さん

大田 由紀

なかにし礼さんの小説で全国的に有名になった「長崎ぶらぶら節」。小説の主人公になった丸山東検査の芸妓愛八さんは昭和6年(1929)、弾き語りでビクターからレコードを出しました。

しかしこれより先に「長崎ぶらぶら節」のレコードを出した人がいます。その人は長崎町検査の凸助さん。この凸助さんこそ、長崎で最初に「阿蘭陀万歳」を踊った人なのです。

ニッポノホン(現コロムビア)レコードが凸助の唄で「長崎ぶらぶら節」を発売したのは、昭和5年(1930)9月、蓄音機もレコードも貴重で珍しかった時代、三味線の「二」とともに「レコード芸者」と評判になりました。その翌年、愛八さんのレコードが発売されますが、タイトルは「長崎ぶらぶら節」が凸助盤で、愛八盤は「ぶらぶら節」となっています。ふたつの唄を聴き比べてみると、ゆったりした節回しで情緒たっぷりの愛八に比べ、凸助のそれはテンポも早く、常磐津で鍛えた調子は、めりはりが利いています。現在歌い継がれている「長崎ぶらぶら節」は凸助が吹き込んだ節回しと歌詞です。



長崎町検査 凸助(料亭一力所蔵)

凸助(本名山本タマ)は、明治31年早岐(現佐世保市)で生まれ、幼い頃長崎市新橋町の料亭一力の養女になります。女将の山本キンは、勝気で機転のきく「タマ」に芸事の素質を見抜き、東京の一流どころの師匠につけて修行をさせます。常磐津は、名人といわれた三蔵の内弟子に、そして常磐津喜三松の名をもらい、大正14年NHKラジオ放送開始のときは愛宕山で師匠と共に放送するほどの



「阿蘭陀万歳」(右から5番目凸助)

山東検査)、そしてふたつのレコード会社のライバル意識とこだわりが、ふたつの名調子を生んだのです。「阿蘭陀万歳」は現在、長崎くんちの出し物として有名なので、長崎生まれだと思っている人が多いかもしれませんが、初演は昭和8年東京での「花柳舞踊研究所」公演会です。この舞踊は福地信世立案、町田嘉章作曲、二代目家元花柳寿輔(のちの花柳寿応)振り付け、万歳役を花柳寿太郎、才蔵役を花柳三之輔が踊っています。踊の内容は「日本に漂流したオランダ人が、日本の万歳をおぼえて正月の祝儀にまわっているうち、故国をしのんで悲しむ」というもので、コミカルな振

り付けとユニークな衣装、斬新な新作舞踊は好評を得ました。東京で話題をさらった新作舞踊を翌年には長崎で披露することになります。

昭和9年3月25日から5月23日までの60日間、長崎市で国際産業観光博覧会が開催され、その演芸館では町検査や東検査の出演も予定されていました。新しもの好きで目利きの長崎人をうならせるには何を演じたらいいか、それには東京で話題になった「阿蘭陀万歳」はどうだろうかと考えました。幸いに東京の舞台で万歳を踊った花柳寿太郎は当時町検査の専属師匠で、長崎初演の「才蔵」役が凸助、「万歳」役はやはり町検査の名妓とうたわれた萬歳(たまたま役名と芸名がいつしよなのですが)が選ばれました。凸助は日本舞踊も立役(男踊り)の名人だったのです。

「阿蘭陀万歳」は足を上げたり開いたり、急テンポの振りは二人の息が合わなければなりません。日本舞踊であつて、その範疇を超えています。それは故国をしのぶ外国人の心象も表現しなければなりません。舞台には華やかさを添えるため、芸者や唐子も登場しました。第一景は長崎出島、第二景は出島阿蘭陀屋敷。考証には古賀十二郎や林源吉など当時の歴史家に加わったのです。会期中52回演じられ大好評で、町検査は大いに面目を施しました。

戦後、凸助は芸妓をやめ、長崎市新橋町で常磐津と日本舞踊の師匠となります。昭和26年新橋町が戦後初めてくんちの踊町を迎えたときに、町内会長でもあった料亭一力四代目渋谷健治氏の発案で「阿蘭陀万歳」を奉納踊りとします。指導はもちろん凸助こと花柳寿太郎、出演は弟子達です。これが「阿蘭陀万歳」の長崎くんち初のお目見えとなります。華やかで異国情緒あふれる出し物は大好評で、2年後の昭和29年には西上町、昭和33年新橋町、36年西上町、昭和37年今博多町とひっぱりだこになりました。凸助さんは、この指導を最後に38年4月64歳で亡くなりました。その後も「阿蘭陀万歳」は数えきれないくらい長崎くんちに登場しました。「長崎ぶらぶら節」と「阿蘭陀万歳」を長崎名物として残した凸助さん、その名を長崎人の心の中に留めたいものです。(長崎女性史研究会会員)

【参考資料】

「長崎の女たち第二集」長崎女性研究会編(長崎文献社)、「歌で巡る長崎」宮川密著(長崎新聞社)、「長崎市史 風俗編」古賀十二郎著、「二世花柳壽輔」(株式会社沙田)、「長崎国際産業観光博覧会協賛会誌」(長崎市) [協力] 料亭一力 故山田博一氏

風信

○長崎の七月と言えば、七日の七夕に盆と精霊流し・飯香浦の地藏盆・長崎大水害忌であるが、長崎の盆は昭和二十七年以来八月の月おくれ盆となっている。其の理由は「ツユあけ」の時期と全国的に八月盆が多いからであると言う。

○七夕と書き、どうして「タナバタ」と読ませるのか?という事については、前回記した事がある。本来・中国の「乞巧奠」の行事を起源とし、我が国には奈良時代に始まり江戸時代には一般の家庭行事になっている。

○長崎の七夕も昭和初年頃までは、長崎市史風俗編の年中行事七月の頃に記してあるように、七夕の前日には笹葉つきの竹を売りに来ていたし、当日は各家の二階に短冊、色紙で作った小さな衣裳、綱などを笹に結びつけて出されていた。特に丸山の七夕は数が多くて評判であった。家では「ひやし素麺」と井戸で冷やした西瓜を食べた思い出がある。

○又、この頃より、家では飯香ノ浦の人形いも、南京カボチャ等を戴き、子供達は夏休みになると札を下げて毎日、大波止より船に乗って鼠島に通った。○今月は次の書物を戴いた。

・加津佐の福田八郎先生より『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教委企画・大石一久先生の編集。全国にあるキリシタン墓碑を解説、写真付きで編集してあり、今迄の各方面におけるキリシタン墓碑研究の総集編である。大型で六三八頁、長崎学研究者としては必見の書である。(発行・南島原市教育委員会)

・花山二太さんより、「今年の三月十六日愛妻を失い、五月三日が四十九日。これから一人ぼっちの闘病がはじまる」と題字にあった「妻と夫の闘病記」をいただいた。花山さんとは長中時代の同窓で、若い時から私は大変お世話になった。ただ、しつとりと読ませていただいた。(制作協力・長崎新聞社)

・長崎県美術館より「長崎県名品図録」、平成22長崎県美術館年報No.5各一冊。図録は同館所蔵の約六千点の中より代表的作品一〇七点を選び紹介したもので、長崎の美術工芸を知識するうえに大いに参考になった。(発行・長崎県美術館)

・松村茂樹先生より『中国近現代文化研究13』松村先生の呉昌碩研究を第一に、巻末には同会既刊の一号〜十二号までの研究課題の標示報告あり。(東京・大妻女子大学文化科 気付中国現代文化研究会発行)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

